



町民文芸

只見短歌会 令和四年三月詠草

雲かかり見慣れし山の浅草は今日は曇りて頂き見えず
馬場 八智

裸木にとどまる雪は花々に劣らぬ程に我の目をひく
目黒 富子

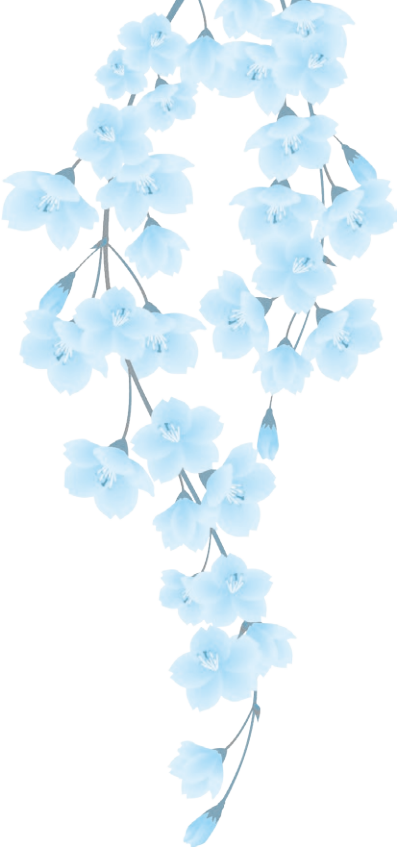
豪雪の晴れ間に集ふ小学生雪像作りマスク賑はふ
関谷登美子

コロナ禍に鼻水の出る幼な孫保育所休みスマホで遊ぶ
新国由紀子

堅雪で足跡見つけ写真撮り何かと孫らはスマホを使ふ
渡部ヨリ子

朝十時送迎車に乗り初雪の説明聞きつつこぶし苑に着く
新国 洋子

(出詠順)



只見俳句会 三月定例会

日高俊平太 指導

キルト刺し目の整うや雪晴れ間
雪晴れや朝餉準備の軽やかに
一 恵

大つらら見上げながらの村湯かな
合格の孫とラインで乾杯す
真理子

時雨ありまた雪ありの春の丘
春晴に誕生祝の笑顔あり
睦 子

雪の層見上げしあの日忘れ得ず
凍返る間近に白き山見えて
紺 青

春浅き谷地に色あり座禅草
車はや見えず今年雪しんしん
妙 子

照るでなく降るでなき四圍朝おぼろ
窓明り背に毛糸の色合せ
礼

冬囲う繩の緩みや春兆す
球児等に雪の町人拳上ぐ
一 穂

黒松の凍てし葉先へ朝日影
鼻かみて一句浮かびし寒の内
修 一

訛飛び交う花冷えの甲子園
躍動す選抜の春を語り継ぐ
信

「おはよう」と交す言葉に軒氷柱
水底に一筋光る冬の川
都

残り糸すべて編込む日向ぼこ
雪女すべて隠せり雪の朝
味代子

